

# 保育の質の向上を目指した保育・教育実習、教職実践演習の 授業充実に関する一考察 (その1)

桑原 広治

A Discussion on Enhancement in Class of Childcare and Teaching Practical Training and Teaching Practical Seminar with Aim to Improve Quality of Childcare (Part I)

KUWAHARA HIROHARU

## Summary

In this paper, students' major challenge in two-year college education was understood as output abilities, or expression abilities. Output abilities cannot be learned in a single divided subject. As well as cooperation among subjects, team communication among faculty members is a very important key that will lead to the development of students into nursing care workers equipped with expression abilities. This paper aims to, as a way to solve this challenge, present as a childcare worker development methodology in future two-year college education achievements and challenges generated through the practice of active learning classes conducted in the core subject of "Childcare and Teaching Practical Seminar" under cooperation with other subjects such as "Childcare Principles" and "The Constitution of Japan" that the author is in charge of.

Key words: childcare worker, first-year education, career formation, cooperation among faculty members, output, presentation skills, childcare and teaching practical seminar, cooperation among subjects, active learning

キーワード： 保育者、初年次教育、キャリア形成、教職協働、アウトプット、発表能力、保育・教職実践演習、科目間連携、アクティブラーニング

## 1 はじめに

2 年間で実践力を備えた即戦力となる人材を養成することは重要な視点であるが、キャリア形成の観点からは単なる実践だけではなく、「現場で通用する人材」を養成するには、省察的な学習能力を育てることが重要なのではないかと考える。

筆者は、これまで日本国憲法、保育原理、教

育行政学、教育学等の理論系の講義科目を多く担当した。短大生にとって、このような講義科目は実践系と違い座学でただ話を聞くという授業形態と思いきんでいる。

それでは、この保育・実践演習は能動的な学習になりうるかという問いが生まれる。ただ単にグループ学習を取り入れ能動的な授業を行い

ましたというレベルでは、講義科目を生かしたアクティブな授業にはほど遠い。なぜなら、グループワークの本質が理解されていないからであり、教員から学生に「グループで話し合いなさい」と指示しても、まず話し合いの仕方が分からないのである。司会の仕方も同様である。「教えられていないことは分からない」し、「体験していないことはできない」のである。例えば、あるテーマを与えて「話し合ってください」と指示した場合、司会者はAさんから意見をいってくださいと投げかける。そして、最後のメンバーの意見が終われば、「話し合いは終わりました」となる学生の「話し合い」の現実をどうとらえるか。ここに大きな課題があることを教員が気づかねばならない。この光景は「話し」という一方通行の姿であり、「話し合い」という双方向の姿ではないことへの理解が必要である。要は、この現状を課題として捉え、グループワークの実践を通して、本質に迫っていくかどうかにかかっているのである。

学生は、近い将来、「先生」として、子どもの前で、同僚の前で、保護者の前で、地域の方々の前で、関係機関等との会議の中で、出張先で、毎月の職員会議で発言（提案）、毎週の校内研修等で「ひとまとまりの話」（保育観・教育観）が求められる。さらに、司会能力についても要求されるのである。

保育現場は、ハブニングの連続である。学生は小・中・高校で「総合的な学習の時間」の学習を経験してきた。総合的な学習の時間の目標には、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」<sup>(1)</sup>と示されている。

大学の授業も総合的な学習の時間を生まれた背景から考えれば、主体的な学びに連動するはずであるが、なぜか生かされていない。学生は、小学校、中学校等での総合的な学習が、何のた

めに学ぶのか、なぜ主体的に学ぶことが必要なのか等についての理解が十分に体得されてこなかったのではないと思われる。つまり、筆者が考えるには、総合的な学習の時間と言いつても、教科と変わらない時間であったのかもしれない。総合的な学習は「アウトプット」を鍛える学びの機会であったはずである。

この点、保育・教育実習は最高のアウトプットの意味を実習指導で具体的に徹底して理解させることが前提となる。この保育・教育実習と保育・教職実践演習さらに、筆者の保育原理、日本国憲法との科目間連携を関連させた考察を試みる。

あらかじめ、保育・教職実践演習の専門的な手続きを経た研究ではないこと、数量的な分析を用いた研究ではないことを断っておく。

## 2 問題意識

### (1) 建学の精神

本学の建学の精神と教育の理念は、「自己を他者に生かすこと」のできる人材育成である。キリスト教的世界観にたち、一人ひとりを大事にし、育てる教育を施し、学生の成長を喜びとすることにある。まさに、学生に「寄り添って」教育する使命である。

学生は、一人ひとりが人生の「伸びしろ」をもって入学してくる。教職員として何ができるかを常に自問自答しなければならない。教職員から見れば、学生のキャリア形成は不十分に見えて当然である。これは教職員自らがこの年代を振り返ってみたらどうだろう。現代の学生には、「短大生だから」「大学生にもなって」「自己責任が求められる」などの表現は通用しないだけでなく、個々に応じた対応が求められる。なぜなら、現代の学生は、「基本的生活習慣」や「基本的学習習慣」にはかなりの個人差があることを覚悟して臨まねばならないからである。だからこそ、教職員間の情報の共有による「複眼思考」は避けては通れないだろう。ここに「初年次教育」を見据えた「教職協働」の意

義がある。

たしかに、学生の「自己責任」は社会人としての大切な要素と言わざるを得ないが、現状の学生理解の有無を認識したうえで、教職員全員が社会人基礎力を通して、理解させていかねばならないだろう。学生理解は「情報の共有」なくしては非常に難しい。まさに「寄り添う」教育は「学生理解」が前提なのである。

## (2) 保育者の課題

実習先訪問で毎回思うことであるが、園長や主任並びに実習担当保育士等と歓談するときに、表面的なやりとりで終始することに疑問と不安をもってきた。

ややもすると、園側からは、「笑顔でがんばっておられます」「元気よく子どもと遊んでおられます」とは悦ばしいことである。このような代表的なコメントは、必要条件ではあっても、学生が現場に出て通用する人材になるための十分条件ではない。筆者は、教員として、この行間をよみとれば、現場には「短大生だから」「もし、うちに来てくれるなら」等を勘案したコメントレベルであるならば困るのである。

もちろん、「笑顔」は大切であるが、翻って考えれば、「笑顔」で過ごすことは、学生にとって非常に難しいスキルであることも忘れてはならない。

## (3) 保育現場からの要望など

毎年のアンケートに寄せられる園側からのコメントには、コミュニケーション能力、社会人としての常識、挨拶・礼儀、マナー、協調性、言葉遣い、子ども観・児童観、権利・義務、4大と短大の比較などが、課題として毎年のようにあがってくる。もちろん一つひとつ取り上げて議論し、対策を講じなければならないが、必要なのは、日々の授業に取り入れた指導はもちろんのこと、学科として課題を共有し、学生への指導に当たらねば短期大学の2年間で即戦力となる人材を養成しなければならぬことを考えるとあまりに時間は短い。

浅野らは、「保育の知識や技術・技能に関し

ては養成校も学生も意識が向いており、保育者としての土台が養成校において指導されていると推察される。しかし、重要なことはそれらの知識や技術・技能を保育において生かすのみならず、実践を次の保育に繋げていく反省的な自己省察が可能であるという問題ではないか。つまり、保育者の持つ知識や技術・技能をどのような理由で、どういった子どもに、どのようにして用いるかを思考する力が備わっているかという課題である。こうした省察する力がなければ、保育実践がパターン化し、保育者の描く保育観、子ども観に子どもの姿を合わせていく保育を展開してしまう恐れもある。したがって、養成時代から、『反省的』に自己省察を行い、自らの保育を改善していく姿勢を身に付けさせるべきではないだろうか。子どもが主体となる保育の質の向上を図る上では、保育者の『反省的』という姿勢が不可欠であると考え。そして、それを養成時代から培うことが重要であろう。」<sup>(2)</sup>と述べている（下線は筆者による）。

保育実習、教育実習、施設実習の振り返りを十分に行い、本学学生の実態と現場からの要望を踏まえて乖離をどう埋めていくかの対策が急務である。しかしそれだけでは不十分である。学生の現状、さらに個々の課題に 대응するためにも、現場に足を運び、現場教師との日常的な交流（勉強会）はもとより、現場の先生方からの情報の収集にも知恵を絞りたい。合わせて、大学において、現場の先生方向けの学生の授業公開も実現させたいと考えている。

## 3 研究の考え方

学生理解の上に立ち、保育・教職実践演習の趣旨を踏まえて、保育実習、教育実習、施設実習、さらに科目間連携の中で学生指導に当たらねばならない。

小川博久は、「養成機関における学科目の編成をどう総合的に把握するかということである。そして中でも学科目を相互に無関係な煙突型とするのではなく、その相互関係性をどう確

立するかであり、その総合性があって初めて、教育実習との関係が確立するのである。少なくとも現在そのことは実現していない。そればかりか学科目への学びがかならずしも、学びへの知的好奇心を育てることに成功していないばかりか、そこでの学びが教育実習、保育実習との十分な連携を達成しておらず、さらに教育実習や保育実習の体験が、もっぱら体験重視で、中には反知性的信念を植えつけられるため、保育者を目指す若者たちに、保育を知的に理解しようとする動機を育てず、逆に、大学で学ぶことなどは役に立たないという信念を与えかねない。しかし、保育の専門性は、自らの実践に対し知的な計画性と意図性に基づき、かかわることであり、実践の結果を反省的に省察し、次の実践に生かすという点にあるのである。こうした視点なしには、保育の専門性は確立しない。こうした状況を克服しなければ、保育者養成の専門性を問題とすることはできない。」<sup>(3)</sup>と述べている（下線は筆者による）。

筆者は、養成校と現場との乖離が存在していると考えている。大学の講義が、実際の保育現場にどうつながっているのか、保育者の動き、子どもたちの動きなどを常に関連させながら講義を組み立てる必要があると考えている。この両者の関係形成が、学生の豊かな発想とともに、素朴な疑問等も生まれ、保育・教育実習での実践につながり、さらに保育・教職実践演習に連動するのではないかと考える。

#### 4 授業の概要

本学の建学の精神は「自分を他者に生かす」の精神に立ち、保育者、幼稚園今日等を養成している。学生に「寄り添う」視点を大切に、保育者をめざすというキャリア形成の観点から、学習の構えを重視する。出席を取る際は、ひとりひとりに目を合わせて健康チェックを兼ねる。

浮田らは、「社会人基礎力の12の要素の中に規律性があります。この初期の段階のみ、始

まりと終わりの区別をきちんと付けて行っています。要するに、「起立、礼」をしているということです。賛否両論あると思いますが、この目的は、最低限の規律性を身に付けさせたいと、連携事業の中で与えられた課題を学生が主体的に推進するには、様々な知識や立場を持った外部の支援者が必要です。学生はこれらの支援者と接触を余儀なくされます。そこで必要となってくる力がこの規律性です。社会人基礎力の中の12の要素の一つである規律性の説明には、「社会のルールや人との約束を守る力・社会に応じて、社会のルールにのっとって、自らの発言や行動を適切に律する」とあります。残念ながら、企業の現役の人でも、満足にできている人が少なくなっているように思います。おそらく、組織の中であたりまえに伝えられてきたことが、うまく伝えられなくなっているのでしょう。また、アドバイザー（教員）の遅刻やルール違反はタブーです。手本は優秀な上級生だけではありません。アドバイザーも含まれています。このようなことは、社会では当たり前ですが、大学では当たり前ではないところがあるので、一言付けくわえておきます。」<sup>(4)</sup>と述べている（下線は筆者による）。

##### (1) 到達目標

1. 今までの実習を含めた学修を振り返り、保育者となるために自己の不足している点を明らかにする。
2. 保育者の役割を認識し、それを果たすための自己研鑽力を身につける。
3. 指導案や教材研究、模擬保育を通して子どもへの対応力が高まる。

##### (2) 授業の目標

保育者像やその職責、保育現場を取り巻く環境などについて、事例研究やグループディスカッションを通してその理解を深める。また、今までの学修の振り返りをもとに、各自の不足している点を明らかにすると共に、模擬保育を通して保育の実践力を高め、自己研鑽力を養う。

## (3) 授業の内容

(3) 授業計画			
1	学修・実習を振り返り(グループ討議) 【桑原】	16	指導案研究と模擬保育と相互評価⑤ 【椎山】
2	設定保育等の振り返りとグループ討議 【椎山】	17	保育現場を取り巻く人間関係 【桑原】
3	保育職の意義・役割について 【桑原】	18	指導案研究と模擬保育と相互評価⑥ 【椎山】
4	履修カルテを活用した自己分析 【椎山】	19	保育者に必要な人間関係の構築 【桑原】
5	事例研究① 子どもとの関わり 【桑原】	20	指導案研究と模擬保育と相互評価⑦ 【椎山】
6	分析、面談をもとにしたプログラム作成 【椎山】	21	保護者に対する子育て支援の事例研究 【桑原】
7	事例研究② 子どもの安全 【桑原】	22	指導案研究と模擬保育と相互評価⑧ 【椎山】
8	指導案研究と模擬保育と相互評価① 【椎山】	23	保護者や地域社会との連携の理解を図る。 【桑原】
9	事例研究③ 保護者との関わり 【桑原】	24	倉橋惣三「育ての心」を読む 【増田】
10	指導案研究と模擬保育と相互評価② 【椎山】	25	保護者支援についてのグループ討議 【桑原】
11	事例研究④ 地域との関わり 【桑原】	26	幼児理解、保護者への対応の事例研究 【椎山】
12	指導案研究と模擬保育と相互評価③ 【椎山】	27	家庭との連携、クラスだよりの作成 【桑原】
13	幼児理解の事例研究とグループ討議 【桑原】	28	子どもと楽しむ製作遊び 【増田】
14	指導案研究と模擬保育と相互評価④ 【椎山】	29	目指す保育者像、必要な資質・能力の確認 【桑原】
15	学級経営に関する事例研究とグループ 討議 【桑原】	30	模擬保育の振り返りと総評 【椎山】

## 4 授業の実際

## (1) 保育・教職実践演習の趣旨

平成17(2005)年12月の中央教育審議会の中間報告で示された教職実践演習の趣旨や基本的枠組みを踏まえ、平成22(2010)年の入学生より実施されている。教職実践演習は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な行動を通じて、学生が身に付けた

資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補



い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできることが期待される。

## （2）アクティブラーニングによる授業実践

アクティブラーニングの中核をなすのは、グループワークである。そこで、「よくグループワークをやっています」と聞くと、実際にはグループワークの形態にはなっているが、内容には多くの課題があるのではないかと、思わざるをえない。

それは、グループワークの本質が理解されていないからであり、教員が学生にグループで話し合いなさいと指示しても、まず話し合いの仕方が分からないのである。司会の仕方も同様である。例えば、あるテーマを与えて「話し合ってください」と指示した場合、司会者は、「Aさんから意見をいってください」と投げかける。そして、最後のメンバーの意見が終われば、「話し合いは終わりました」となる現実をどうとらえるか。ここに大きな課題であることを教員が気づかねばならない。つまり、この光景は「話し」という一方通行の姿であり、「話し合い」という双方向の姿ではないことの理解が必要である。

三浦は「学生は高等学校を卒業するまでは、知識の多寡を競い、自身の知識や考えならびに経験を他者と共有することのない競争的学習を経験をしてきましたが、社会人基礎力や学力としてチームワークや協調性が求められていることに鑑みれば、協同的な学習を体験することには十分な意味と価値があると考えられます。」

(5)と述べている（下線は筆者による）。

さらに、三浦は、「学生の大半は高等学校を卒業するまでにグループワークをほとんど体験していません。小学校の段階では何度か体験したかもしれませんが、教育段階が上がるにつれて、そのような機会は少なくなっていく傾向にあります。そのような学生を対象にグループワークを導入し、展開していくためには、教師がグループワークの意義や可能性を知っておく必要があります。」<sup>(6)</sup>と指摘している（下線は筆者による）。

## （4）グループワークの実際

【課題】次の文は安全に関わる具体的事例です。それぞれの設問について、自分の考えを書いてみましょう。

日々の送り迎えは保護者と一緒であるが、今日は園外保育に出かける日である。歩いて15分程度の講演まで、二人ずつ手をつないで歩く。子どもたちは、「横断歩道では信号が青になってもすぐに歩き出さない」ことや、「渡り出す時は右や左を見て、もう一回右を見てから手を挙げて渡ること」等は知っている。列をつくって横断歩道を渡っている時に子犬がそばにいたので、Aちゃんは列から離れて子犬の方へ駆け出して行った。

- 1 Aちゃんはどのようにして列を離れたのでしょうか。列を離れた時のAちゃんの心理として、どのようなことが考えられますか。また、列を離れた原因は何処にあると思いますか。
- 2 子どもが予想していないような行動をとった時に、保育者は子どもにどのように関われば良いと思いますか。このような時、あなたはどのような言葉をかけますか。
- 3 子どもの安全について、保育者は日頃から、どのような指導をしておかなければならないと思いますか。

まず事例問題に取り組むうえで、重要なことは、自分の考えをもつことである。最初は感想でもいいし、何らかの形でアウトプットしていく習慣化を図る必要がある。その上で、グループワークの前提となる、話し方、聞き方、伝え方などのベースとなる対話並びにコミュニケーションについて理解しておかねばならない。

### ①対話とは何か

社会では問題事例が発生する、すぐに、それはコミュニケーションが不十分だからと片付けられる。それはコミュニケーションに対する積極的な態度が欠けているからとも指摘されることがある。このような指摘は、コミュニケーションを改善すれば、すべてがうまくいくかのようになっているのではないかと、事はそう簡

単なことではない。そのことを端的にしめしているのが、下記のデータである。学生は、就職するまでに、話し方、聞き方の系統的な学びを受けて来なかったことを示していると考えている。

企業側は圧倒的に「コミュニケーション能力」を求める  
企業が学生に求める能力

順位	能力	割合
1	コミュニケーション能力	83%
2	チームで働く力	49%
3	前に踏み出す力	34%
4	目標達成力	32%
5	適応力	31%
6	交渉力	31%
7	基礎的な学力	23%
8	問題解決能力	21%
9	社会常識	17%
10	異文化への理解力	6%

※2016年度「就職意向調査」結果  
出典：JIB 及び 2017 年 新卒採用徹底解剖 CD-ROM

図1 HP総研「2017年新卒採用徹底解剖」より

多田は、「子どもたちの実態からスタートしなければ、対話指導の効果は高まらない、いくら先進的な手法を用いても、子どもたちの状況や心情を考慮しなければ、事実として対話力を高めることはできない。」<sup>(6)</sup>と述べている。

さらに、多田は、「対話と会話は異なる。対話とは言語や非言語により、相手とコミュニケーションを行い、共有できる価値観や概念を生み出していく行為である。語り合いによって何かを生み出すことを目的とした対話では、伝えるものを明確に伝え、相手の伝えたいものを的確に把握することが必要である。学生たちをみていると、休憩時間などでの会話はできて、お互いに主張をぶつけ合う対話ができない。それどころか、会話を拒否する傾向の学生も多い。彼らと個人面談などを通してじっくり語り合うと、その深層には自信のなさという心的要因が漂っていることに気づかされる。」<sup>(7)</sup>と述べている。

筆者作成の下図で示すように、まずは、自己肯定感を醸成する視点に立った「自信回復」のプロセスが必要だと考えている。

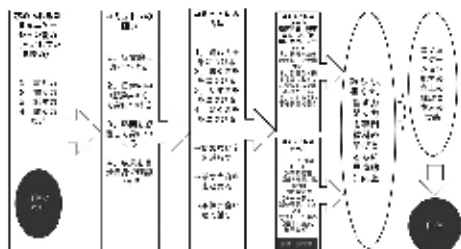


図2 自己肯定感を醸成する仕組み (筆者作成)

中島は、「自尊感情は、自ら生きる価値を認識し、自分の活かされた命を大切にしている感情です。内閣府の行った調査（日本を含めた7カ国の満13～29歳の若者を対象の意識調査『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査。平成25年度』）によると、日本人は諸外国の人に比べて、自尊感情が低いことが明らかになっています。『自分自身に満足している』と答えた13歳から29歳の若者は7.5%。なんと10人に1人しか、『自分自身に満足している』と答えなかったのです。また、『どちらかと言えば満足している』と回答した人は38.3%。『満足している』『どちらかと言えば満足している』の回答率は、合わせて45.8%という結果でした。」<sup>(9)</sup>と述べている。このデータは、調査国の中で、最下位という。

堀は、「人はひとりでは変われない。何を变えればよいか分かって、一歩踏み出す勇気が出なければ絵に描いた餅になります。変えないほうが楽であり、新たな信念に基づいて行動するのは大きなエネルギーを要します。今まで慣れ親しんだ常識を手放すのは不安であり、失敗する恐れもあります。『今までの自分は何だったんだ?』となり、少なからず自尊心を傷つけられます。そこで大切になるのが他者の存在です。『よく決断したね』『応援しているよ』という声があってこそ、安心して過去の自分を手放すことができます。考え方を变えるには、共に行動する仲間の存在が不可欠なのです。」<sup>(10)</sup>と述べている。

大木は、「『対話や話し合いは、手段である』私がいつも、心に留めていることです。『対話』という手段を用い、実現したいことは何か? 授業を行う前に、そして行った後に、常にこのことを考えています。対話型授業の心構えの1つ目、それは、授業の目的や目指したい姿を、心に思い描くということです。」<sup>(11)</sup>と述べている。

筆者は、グループワークを通して、下記の能力を同時に鍛えていく。

- ① コミュニケーション・トレーニング
- ② メモ・トレーニング
- ③ ひとまとまりの話

- ④ ひとまとまりの文章  
 ⑤ 時間感覚: 15秒、30秒、1分、3分、5分、10分



図3 「グループワークの相互参観」

浮田は、グループワークやプレゼンテーションは、観て比較する上で役立つのが「上級生や他校のプレゼンテーションデータです。観て比較できる素材が次のステップに大いに役立ちます。『なるほど、手の動きはいいね、主人公が発表者になっていてだめだね、スライドとの整合性がないね、スライドが読めないし聴衆者のことを考えていないね、原稿は持たない方がいいね……』などいろいろな意見がでます。幸い私の所にはさまざまなタイプのプレゼンテーション動画が保存され視聴覚教材となっています。そこでレベルが高いものと比較させることである違いが発見できます。」<sup>(11)</sup>と述べている。

#### (5) 教員は学生に現場情報をいかに伝えるか

保育・教職実践演習の授業は、大学で行う教科の授業を現場に近づけながら、一つの事例を通して、議論させていく手法をとる。そのためには、教員は実習先訪問はもちろんであるが、可能な限り現場に足を運ぶ必要がある。現場保育者との勉強会や園長などとコミュニケーションをとっておくことで学生への補説などもスムーズに行く。筆者はこれを教材研究と位置付けている。



図4 社会人基礎力：経済産業省HP

#### ○実習先訪問

養成校は「育てたよ」と現場に送り出すが、その力は、現場にとって必要な力なのかの議論がない。現場が求めている力は何かを考えているか。

実習生が一番難しいのは「笑顔」を出すことである。筆者の授業の基本は、教員研修会でも申し上げたが、「笑顔・返事・反応する」の3点セットである。しかし、この「笑顔」の表出ほど難しいことはない。授業中に「笑える子」は反応する意味も分かっていて、理解しているから「笑える」のである。1年生の授業も終わったというのに、どれだけの学生が笑顔を表出できただろうか。筆者の大いなる反省でもある。このことは、学生にも話していることであるが、筆者は教育実習で3度ストップがかかった実習生でもあり、笑顔なんてほど遠かった。学生は個人差がある。成長が緩やかな学生には、まず「保育者・教育者マインド」を醸成することが重要で、園側も、養成校も知っておく必要があろう。

改めて、4月から担当する「言語表現」の教材研究につなげる。実習先訪問が「教材研究」につながる事例でもある。

本人との面談は、「観察力」がキーワードであった。・本人との面談は中身の濃いものとなった。本人の学びの姿勢が伝わってきた。まず、観察力について整理しておく。観察力と洞察力の違いから考える。

違いは、表面だけを見る力（観察力）の違いか、内面を見抜く力（洞察力）かにある。どちらも、コミュニケーションには、必要な力である。

「観察力」を鍛えるには、継続的にみる＝観



察することで発揮できる力と考えたい。以下の、Mさんの考察はお見事であった。

それは、子どもの姿の一瞬を切り取ってみても、その一瞬しか見えないが、継続的に観察すれば変化を見つけられる。変化ならば見つけやすい。観察してみつけた変化は、コミュニケーションで使える情報のひとつになる。以下、チャット・メールから紹介する。

Aくんはとても素直で何にでも興味を持ち、前向きに取り組むことが出来ると知りました。ひとつの事でその子を決めてしまうのではなく、沢山の関わりの中で、保育者自身が子どもをプラスにとらえ援助することがとても大切だと思いました。

1年生の学生Mは「私は今回の保育実習で現場でしか学べないことを沢山学べたと思います。教科書には断片的な事例しか載っていません。しかし、実際に保育の現場ではその子の違う一面を沢山見ることが出来ました。多動で暴力を振るってしまうAくんは、給食の時間になると全くの別人のようになります。きちんと座り、食前の言葉を言い、黙々と食べています。そして、先生に言われなくても食後の言葉をきちんと言い、片付けまで来ています。また、他の子に注意することもできます。給食の時間はしっかり集中することが出来ていました。

それ以外の時間でも2・3回説明すれば理解して行動することに気づきました。いつもひとり遊びや集団遊びが上手くできないAくんはよく人を蹴ったりしてしまいます。そんなある日、玩具が沢山あるホールで遊ぶことになりました。ホールは広がったので他の子どもが邪魔すること無く1人で遊べます。その環境が良かったのか、Aくんはずっと遊び続けました。先生に言われるまで遊びを辞めない日はその日だけでした。その日は友だちに玩具を貸すことも出来ました。Aくんは何も出来ない暴力的な子と見られてしまうのですが、関わり方や環境だけでAくんの持っている良いところを引き出せると思いました。

○毎時間の授業振り返りコメントの紹介

- 自分の意見を出しやすい雰囲気ของทีมの中で次々とみんなの意見が出てくる。それに対して共感できる時もある、新しい発見をさせてくれる時もある。次からは気になったこと、もう少し理解を深めたいと思ったときには質問したいと思う。
- 他のメンバーの意見を聞いて納得する意見も多かったが、言葉を全て書き留めることが難しく、あとからの振り返りが不十分になってしまった。短時間でメンバーの意見をまとめることも難しいと感じている。
- 相づちがある方がとても話しやすい。司会者は発表者が話をしやすいような雰囲気を作ることが大切だと思った。また、他のチームのグループディスカッションを見て、話し合いをする力が身についていると感じた。前までは、話し合いをする時に発表者の方を見ていなかったり、相づちを入れずに聞いたりしている人がいたが、今では、人の話をしっかり聞いて、自分の意見を発表するようになっていた。これからの授業でもっと高め合っていきたい。
- 自分の考えたことをまとまりのある話ができ、他の人の話でもメモを取りながら聞くことができた。グループごとで進め方や考えたことも違って、他のグループの話聞くことでより考えが深まった。
- 私はグループの人の発言に対し質問することができなかった。だから次回は発言を聞きながら気になったことなどはメモ書きをし、質問ができるようにしたい。そして話し合いを深めていきたい。今日は他のグループディスカッションを見た。人それぞれでいろんな事例を聞くことができ、おもしろいと思った。また皆がどのような意見を持っているのか、考察しているのかを知ることができた。自分の知識や考えを深めることができたのでよかった。
- グループワークは自分の長所にも気付くことが好きだ。「○○さんの○○なところが良い！」と言い合う場面がとても好きで、今後もこのような場面が続いていったらいいと思う。

- チームに貢献することができた。今日のグループワークを通じて、自分が保育者となったときに担任を持ち、学級経営していくときに気をつけるべきことについて理解することができたのでとてもよかった。
- いろんな意見やこういったことがありましたと、発表していて子どもの発想や考えはとても豊かだなということを改めて知った。進行していく人たちもとても上手く進めていて、すごいなと思った。他のグループの話し合いの様子を見るのはとても勉強になると思った。話し合いはチームワークが大事だなと改めて感じた。
- 他のグループのグループワークを見ることで、自分の中では思い浮かばなかった考えや、意見のまとめ方など様々なことに気づき学ぶことができた。また、良い点などを見つけることができた。今後のグループワークや、自分の発表の中でいろんな人の良い所を真似して活かしていきたいと思った。授業が終わるころには、数段にレベルアップできるように頑張りたいと思う。
- 今日司会をさせていただいたが、次にどんなことを話そうなどと考えてしまうと、人の話を集中して聞けなくなるので、きちんと聞いた上で質問したり自分の意見を発言できるように、日常の会話から習慣づけたい。これは保育者になってからも、クラス会や職員会議等に限らず、普段からの何気ない育児に関する相談や会話にも大切なことになると思うので、まずは焦らず「相手の話を聞くこと」を課題として司会者の役割を一つずつこなしていきたいと思った。また、予想もしない行動、自由な発想で遊ぶ姿は、今回の教育実習では見るができなかったことを振り返り、そう思った。ブロックを目の前にボーッとする子どももいた。その背景として、その園は絵の描き方も、遊び方も何もかも指定されていた。自由な発想は想像力へとつながると思うので、子どもの発想を褒め伸ばしてあげたいと感じた。
- この授業でグループのリーダーになって、最

初はどうしていいのかわからず戸惑っていたが、回数を重ねる毎に、流れもわかってきて、少しずつスムーズに進めることができたと感じている。当てられたときに、すぐに答えられるようになったのも成長かなと思った。今回の学級経営の事例については、少し難しかったが、自分なりの答えを相手に伝えようとがんばった。

- グループをまとめるリーダーは無色透明でありたいと思う。メンター、ファシリテーターは存在感を消してすべての人の意見を引き出せる時に、その役割を果たせると思った。自分の意見を強くいうことが自己主張なのではない……と思うが、自分の意見を持つことと、自己主張の違いがわからない。
- 今日の学習を通して、司会者の振り方によって雰囲気とか何を伝えたいのかが変わってくるなと思った。私は急に振られて戸惑ってしまったことがあったけど、自分なりに伝えたい言葉（ワード）を頭の中に出して口で伝えられたので良かった。ただ書いたものを読むのではなく、それを更に展開していくことも大切だなと思った。
- 私は聞かれたことは、たまたま答えるようにしているが、まとまりがない話をしてしまう。しかし、他のメンバーは、分かりやすく伝えることが前提で話にまとまりがあるので、聞いているこちらもよく理解することができる。今日感じたことは、中身の話をする前に、〇〇さんと同じように、あるいは〇〇さんとは違ってなどと、付け加えると、さらに良くなるのだと思った。さらに、話題を展開すると話が広がり学びが増えると思った。
- 授業を通して学級経営について少し理解することができた。私たちのグループ内では学級経営や学級経営案について理解することがあまりできなかったが、他のグループの話を聞き、そういう考え方もあるんだなと考えさせられることがたくさんあった。今後もグループ内でよく話し、意見を聞き、グループワークを楽しみたいと思った。また、他のグループの話し合いも聞き、私たちとは違う意見を

聞き入れたり、グループワークの仕方を学びたいと思った。

- 当事者意識を持って、グループで高めることが大切だと分かった。自らの意見だけでは物足りない時や周りの人の色々な意見があるから質が向上していくのだと思った。社会人としてあたり前のことをできていなければ、仕事が始まってから自分が困ることになる。「社会人として」ではなく、人としてあたり前のことはできていなければならないと考えた。新人としてやる気、向上心を持って仕事をすることが私たちにできることだと思った。他にも、誰にでもできることは挨拶、笑顔、掃除である。社会人 1 年目の私にとって今すぐにできることはこの 3 つだと思う。自分にできることは精一杯取り組むことが仕事へのやる気だとも見られ、成長していけると思う。話でも出たように社会人は、学生とちがいが求められる側である。意識をもって過ごしていきたいと思う。
- 発表者の立ち居振る舞いや声の調子など見習いたい点が多くあった。発表の内容をふくらませることが難しいと感じているが、自分が経験したことを基に話すことは話しやすいと思うので、多くの経験ができるように視野を広げたいと考えた。
- 個々が持っている良い特質を良い方向のエネルギーに変えることができた時（周りでサポートしている人も）うれしく思った。グループが全体で成長するというのは、こういう感覚なのかなと思った。
- 保育者として働くことばかりを考えていたが、自分たちは、保育者になると同時に社会人になることを自覚し、仕事をしている時だけでなく、日常の買い物だったり、運転だったりにも責任を持って、行動することが当たり前だけど必要だと感じた。その行動は、子ども、保護者、地域の人から見られて信頼関係にもかかわってくると思う。普段から気を抜かず、保育者（社会人）として振る舞いをしたい。

#### 4 研究の考察

保育・実践演習のキーワードは「学びの軌跡の集大成」である。

保育・教職実践演習をアクティブラーニングで授業を展開してきた。グループワークやプレゼンテーションの場で、科目間連携の意味を学生が理解し、〇〇先生の「社会福祉論」で学んだなどとキーワードを盛り込んだ発表内容を編集できるようになってきた。

また、学生一人ひとりが「ひとまとまりの話」として、15秒、30秒、1分、3分、5分のコメントが発信できるようになった。また、毎回、振り返りの提出を求め、次回には全員のコメントをプリントにして返却することを繰り返してきた。その成果として、ひとまとまりの文章（200字程度）を書くためのモチベーションも高まってきたように思われる。学生の「ひとまとまりのコメント」（200字程度）である。学生が、反省的に振り返りができるようになったことが成果であり、さらに、次の保育の実践につながる保育者をめざしてほしい。

#### 5 研究のまとめ

教職員の現場理解が必要である。教職員は、実習先訪問や高校訪問等での情報収集だけでなく、可能な限り現場（園や高校等）に足を運び、情報交換して現場情報を収集し、学生にタイムリーな情報発信が重要となる。一方、短大教育における学生の大きな課題の一つは、アウトプット能力、つまり表現能力にある。アウトプット能力は分断された一つの科目だけで体得できるものではない。科目間連携はもちろんのこと、教職員間のチーム・コミュニケーションこそが学生の表現能力を備えた保育者養成につながる大きな鍵となる。教職協働は言い換えれば「チーム」であり、「組織」のことといえないか。

学生は、近い将来、「先生」として、子どもの前で、同僚の前で、保護者の前で、地域の方々の前で、関係機関等との会議の中で、出張先で、

毎月の職員会議で発言（提案）、毎週の校内研修等で「ひとまとまりの話」（保育観・教育観）、さらに、司会能力についても要求される。今回取り上げる「保育・教職実践演習」が「学びの軌跡の集大成」の意味でもある。

2年間で実践力を備えた即戦力となる人材を養成することは重要な視点ではあるが、キャリア形成の視点からは単なる実践だけではなく、「現場で通用する人材」を養成するには、「省察的な学習能力」を育てることが重要となる。これが「保育者養成機関」に求められる専門職としての「質の向上」なのである。

## 6 おわりに

短期大学の授業は実に難しい。しかし、キャリア形成が十分でない学生の「伸びしろ」を学生とのコミュニケーションによって引き出し、手当てを一緒に考えていくという楽しさが短大にはあると考えている。人生は長い。学生の18歳から20歳前後の学生の夢への懸け橋になりたいと思う。この一年の授業改善における課題をさらに分析し、その（2）、その（3）と継続研究に取り組んでいきたい。

### ※引用・参考文献

※参考文献・論文資料等

- (1) 文部科学省「3 総合的な学習の時間の一層の充実」
- (2) 浅野浅井広・高橋洋行・児島雅典「保育の質の向上を目指した教育実習、教職実践演習の在り方—自己省察する保育者を養成—」松山東雲女子大学研究紀要, 2017, p 47
- (3) 小川博久「保育者養成論」萌文書林, 2013, pp 13~14
- (4) 浮田英彦他「弱みを強みに変える 本気が目覚める課題解決型学習」梓書院, 2013, p 19
- (5) 三浦真琴「グループワーク その達人への道」医学書院, 2018,
- (6) 三浦真琴: 前掲書
- (7) 多田孝志「対話力を育てる」教育出版, 2007, pp 1~2
- (8) 多田孝志: 前掲書
- (9) 中島 輝「自己肯定感の教科書」SBクリエイティブ, 2019, pp 77~78
- (10) 堀 公俊「これからはじめるワークショップ」日経文庫, 2019, pp 21~22
- (11) 大木浩士「博報堂流 対話型授業のつくり方」東洋館出版社, 2020, p 14
- (12) 浮田英彦・日野資成・伊藤文一・上野史郎・原口芳博「弱みを強みに変える 本気が目覚める アクティブラーニング」梓書院, 2015, p 62
- (13) 小田隆治編・清多英羽「大学におけるアクティブ・ラーニングの現在」「保育者養成課程における講義系科目の実践」ナカニシヤ出版, 2016, p 52~53
- (14) 学生理解の理解を重視する大学授業」玉川大学出版部
- (15) 河村茂雄「アクティブラーニングを成功させる学級づくり」誠信書房, 2018, p 3
- (16) 大塚裕子・森本郁代「話し合いトレーニング」ナカニシヤ出版, 2011,
- (17) 中央教育審議会（平成24年8月28日）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」文部科学省
- (18) 中井俊樹(2019年)『アクティブラーニング』玉川大学出版
- (19) 大学教員のための授業方法とデザイン（玉川大学出版）